sample

92-05-25083

慶應義塾大学ビジネス・スクール

亭主と客人

松林を吹き渡る風が、茶室を静かに駆け抜けていく。いにしえの茶人は、釜の湯が沸き立つ音を松風に見立てた。炉には香が焚かれ、非日常の空間が深い香りで満たされていく。障子越しの光はやわらかく、小間(こま) へ陰影をもたらしている。床の間には、禅僧の書が掛けられ、時の花が野にあるように生けられている。

茶道とは文字通り「道」であり、いくつものルールの集大成である。亭主は茶道のルールに則ったしつらえをして、客人の五感すべて ― 音、香り、光、味わい、手触り ― を満足させようとする。

たとえば、冬は客人と亭主との間に炉が切られ、赤く熱した炭火を客人に見せて暖かさを感じてもらう。夏は大ぶりの水指(みずさし) を用い、水面を見せて涼しさを演出する。これらは、すでに確立されている茶道のルールである。季節によって、また道具によって、点前(てまえ) は異なり、すべての所作や配置にルールがあるのが茶道である。茶道は点前というルールの積み重ねであり、「もてなしのしくみ」と言ってもよい。

しかし、茶人は「もてなしのしくみ」を知り尽くす一方で、「しくみの限界」がどこにあるかも知っている。客人をもてなすことは、茶道のルールを守るだけでは全く不十分だからである。

亭主が茶会を開く際、おそらくいちばん時間をかけるのは、その茶会のテーマを何にするかを考え、決めることであろう。それが決まると、亭主は茶道具、掛け軸、花、菓子の取り

このノートは慶應義塾大学ビジネス・スクール MOT 実証授業「ケースメソッドで教える授業カリキュラムの開発とマネジメント」の教材とするために、大倉由利子（ケースメソッド教育研究所）が作成した。(2004.12)

本ノートは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、ノートの複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町２丁目１番１号、電話 045-564-2444、e-mail case@kbs.keio.ac.jp)。また、ノートの注文は http://www.kbs.keio.ac.jp/case/index.html。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、本ノートのいかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またはいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送は、これを禁ずる。

Copyright©2004 は慶應義塾大学ビジネス・スクールが保有する。

合わせを考えるのだが、ここには教科書的な拠り所がない。

客人の楽しみは、茶会に来て、そこで今日のテーマを探すことにある。客人は、亭主宅を訪問したそのときから、茶会の基調となるテーマを探そうとしている。そこに、ひとつの意味をなさないバラバラの道具立てがなされていると、客人は戸惑い、失望するであろう。だからこそ、亭主はテーマの一貫性を守り、取り合わせを丁寧に構成して、客人に今日のテーマを探すプロセスを楽しませることにこころを配る。そこには、「その茶人」が「その客人」をもてなすことの本質がある。亭主のまごころや審美眼は、積み重ねられたルールのその先にはじめて表れる。

ある特定のひとりの客をもてなす茶事として、兎年の還暦のお祝いの茶事を考えてみる。亭主は兎や還暦に因んだ茶道具の取り合わせを行うだろう。それがさり気なく、ひとつのテーマとして今日の茶事に一貫される。菓子は月に見立てた丸いものを用意するかもしれない。茶道具は客人に喜んでもらうための、希少な道具を揃えるであろう。茶掛の軸は還暦にあっての新しい志を意味する書になるかもしれない。「兎年の還暦」を迎えるその客人に、取り合わせの趣向、その時間、その場を楽しんでもらいたいとこころから願うこと ― そういう「もてなしのこころ」をもって、亭主が茶会を構成しようと努めたとき、茶道ははじめて「真の道」になる。

「客人をもてなすこころ」は、茶道のルールを超えたところにあり、客人に満足を与えている。「もてなすこころ」を持った亭主ならば、客人が頭を下げて礼をする茶掛けの軸に、自分の書いた書を掛けることはしない。それは失礼にあたるからだ。また、客人から作陶した茶碗をいただけば、その茶碗を茶会でお披露目する。そして、もし客人の前で点前を失敗しても、何事もなかったかのように平常心で振舞う。なぜならば、客人側に逆の気遣いをさせないためだ。

これらは、茶道のルールとして記述されているものではないし、「もてなしのしくみ」のリストに入っているものでもない。しかし、亭主に「客人をもてなすこころ」があり、亭主がそのこころを持ったまま「客人の立場に立つ」ことで、おのずと表れる行動なのである。

そもそも、茶道という奥深い道について、「もてなしのしくみの限界」などという大それたことを、未熟な私が書いてよいはずもない。けれども、あるしくみを極めようとしたときに、しくみにはこころがこもり、こころに支えられた行動が、私たちを「しくみのその先に到達させる」という実感だけは持てている。それは、「こころの灯がしくみにともる瞬間」であり、「こころのこもったしくみとして動き出す瞬間」だといえる。

不許複製 慶應義塾大学ビジネス・スクール 2005 Jul.
コンテンツワークス株式会社 BookPark サービス